

視点

子どもにとっての魅力的な遊び

沖縄キリスト教短期大学 地域こども教育学科
准教授 糸洲理子



乳幼児期の子どもが育つためには、何よりもまず、安心・安全な環境の下、自分なりの興味・関心を基に、思う存分、遊ぶことが大切です。幼児期の教育は、一人の子どもの生涯にわたる人格形成の基礎を育む最も重要なものであり、その後の教育の基礎となります。このことは、『幼稚園教育要領』の「第1章 総則 第1節 幼稚園教育の基本」で、「幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」が重要であるとして示されています。

一方、新型コロナウイルス感染症の蔓延は、私達の生活を全く予想もしなかったものへと変えてしまいました。コロナ以前から、経済活動や技術革新などによる社会の変化や子育て環境の変化など様々な要因により子どもの遊びが変化していると指摘されていましたが、新型コロナウイルス感染症により、幼児教育・保育現場では幼い子ども達の命を守るために、子どもにとって最も大切な遊びや園生活を制限せざるを得ない状況へと追い込まれました。

コロナ以前のある年、学科の同僚と「子ども達がごっこ遊びの中でカードのポイントで支払い（の真似）をしている」と話題になりました。「私達大人の生活の様子を子どもはよく観察している。おもしろい！」と話が盛り上がり、これがきっかけとなり、同僚と「子どもの遊び」について共同研究を始めました。沖縄県内の幼稚園、保育所、認定こども園の10年以上の保育経験者を対象に「ごっこ遊び」に関するアンケート調査からスタートして、県内の幼児教育・保育現場での子どもの遊びの観察、保育者を対象に遊びについてのインタビュー調査まで、4年間の研究となりました。特に2021年度に行った

子どもの遊びの観察では、子ども達の遊びとその発想の豊かさに何度も驚かされました。

あるこども園の4歳児クラスでの「おうちごっこ」では、小学生役の子どもが、「おかあさん、ここがわからないからおしえて」と言うと、母親役の子どもが「おかあさんは、いま、ごはんをつくるのにいそがしいから、あとで！」と返答し、子どもが「わかった」と言いながら、黙々と勉強（ふり）していました。その傍では、お姉さん役の子どもが赤ちゃん（人形）の髪を梳いて、トントンと優しく寝かしつけていました。このごっこ遊びは、それぞれの家庭の様子が垣間見られた微笑ましいものでした。また、ある保育所では、12月の少し寒い時期でしたが、5歳児がお互いに遊びのイメージを共有し、力を合わせて砂山を作っていました。さらに、試行錯誤しながら、その周囲に溝を巡らせて水を流し、「おんせん！」「あしゅはきもちいいなあ」と、大人顔負けの言動で温泉を楽しんでいて、思わずクスッと笑ってしまいました。これらは、温泉や足湯など大好きな家族との生活体験を再現した遊びでした。

子どもにとっては、人や物、自然や社会のできごとなど身近な環境への関わりそのものが遊びとなり、好奇心、興味・関心、探究心を持った学びへとつながります。

特に、園生活で子どもが最も信頼を寄せる保育者は、子どもの人格形成や幼児期にふさわしい生活をする上で大きな影響を与える存在です。そのためには、社会がどのように変化しようとも、保育者自身が周囲の環境や社会情勢に興味・関心を持ち、探究心を持って物事に関わることで、子どもにとって魅力ある遊びの経験と学びを援助する役割を果たすことが、結果として、魅力ある幼児教育の創造につながるのだと、共同研究を通して改めて実感しました。